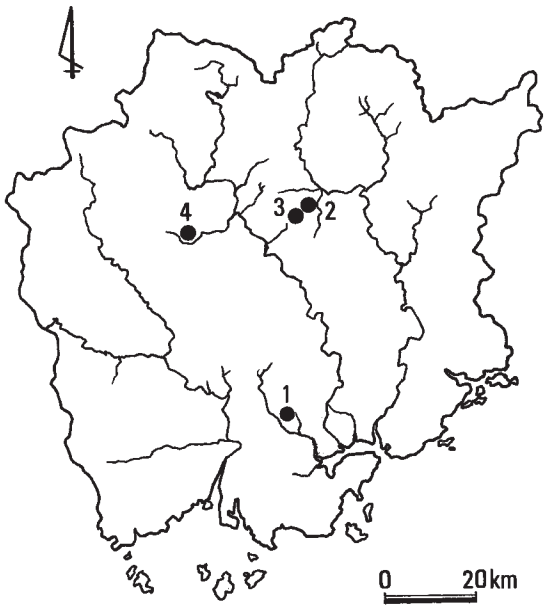
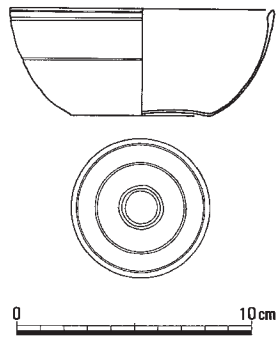
２　溝25出土の銅鋺について

溝25の下層より出土した銅鋺は、底部を半分ほどと体部をわずかに残す破片であった。平底の外面には２条一組の沈線が同心円状に多数巡り、底径は5.4㎝、底部の厚みは1.5～2㎜を測る。底部から緩やかに立ち上がる体部は厚さ1～1.5㎜で、現存する器高は1.2㎝である。

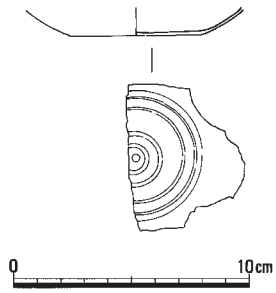
現在、県内出土の奈良時代以前の銅鋺は中撫川遺跡を含め４例が確認されている。なかでも荒神西古墳出土のものは完品で、若干上げ底となるが中撫川と同様に沈線が多数巡る平らな底部をもち、厚み・底径ともほぼ同じである。これらの銅鋺は毛利光俊彦氏の分類(註１)する無台鋺ＢⅠ類にあたると考えられ、うち体部に沈線が多数巡るものを7世紀前半に、沈線の少ないものを7世紀後半に比定している。荒神西古墳の銅鋺は無袖の横穴式石室内から宝珠つまみの須恵器杯蓋とともに出土している(註２)。杯蓋の年代は７世紀半ばと考えられ、毛利光氏の編年ともズレはない。中撫川の銅鋺についてもこの年代を当ててよいものと思われる。



1　中撫川遺跡　　3　殿田１号墳
2　荒神西古墳　　4　定北古墳



荒神西古墳出土銅鋺（地図２）



中撫川遺跡出土銅鋺（地図１）

第61図　岡山県内銅鋺出土地分布図

岡山県内出土銅鋺一覧表

	遺跡名	遺跡種別	出土遺構	銅鋺種類	毛利光分類	時期	備考
1	中撫川遺跡	集落	溝	無台鋺	無台鋺ＢⅠ	7世紀後半	
2	荒神西古墳	円墳	横穴式石室	無台鋺	無台鋺ＢⅠ	7世紀後半	
3	殿田１号墳	円墳？	横穴式石室	無台鋺	無台鋺ＡⅠ	7世紀後半	
4	定北古墳	方墳	横穴式石室	鋺　蓋	高台付鋺Ｂ or 高脚付鋺Ａ	7世紀後半	

銅鋺は仏具として捉えられているが、寺院やそれに関連する遺跡からよりも古墳からの出土量が多く、分布も関東周辺に集中している(註３)。こういった状況から必ずしも銅鋺を仏教と結びつけて考える必要はなく、実用の豪華な食器として豪族層に浸透していたとの見解がなされている(註４)。古代の集落内の溝から破片となって出土した中撫川遺跡の銅鋺はどのような性格を持つものであったのか。長野県では集落遺跡からも銅鋺が多数出土していることが報告されており、その年代にも幅があることから、金属器を頂点とする大陸の食膳具様式を畿内で受容した後、７世紀代には地方で実用の食器として有力豪族層に浸透、９世紀以降は施釉陶器に高級食器としての地位を譲り、その後は仏具としてのみ中世以降も残されたという一連の流れが想定されている（註５)。中撫川の銅鋺が出土した溝25は『県報182』の溝25に続くもので、7世紀中葉～８世紀代の遺物を含む。この溝の東岸には8世紀代の土器をピットに含む大形の掘立柱建物群が整然と並んでおり、建物周辺の包含層やたわみからは多量の緑釉陶器が出土している(註６)。また今回の調査区のすぐ隣でも緑釉陶器を含む掘立柱建物が検出されている(註７)。溝・建物・周辺埋土から出土した銅鋺以外の仏教に関係する遺物としては、瓦が若干あるにすぎない。また溝内の遺物に完品の土器が一括して廃棄されたようすはなく、破片が散在する状況であった。

以上のことから中撫川遺跡では、溝周辺の集落や建物群周辺で緑釉陶器が現れるまでの間、高級食器として須恵器や土師器とともに銅鋺が長く用いられたのではないだろうか。そして破損した後には他の食膳具と同様、溝に廃棄されたものであったと考える。（稲谷）

註

（１）ａ毛利光俊彦「古墳出土銅鋺の系譜」『考古学雑誌』第64巻　第１号　1978年
　　ｂ毛利光俊彦「青銅容器・ガラス容器」『古墳時代の研究　第８巻　古墳Ⅱ　副葬品』雄山閣　1991年
（２）村上幸雄ほか『糠山遺跡群Ⅱ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980年
（３）註（１）文献
　　大嶋和則『久本古墳』高松市教育委員会　2004年
（４）註（１）ｂ文献に同じ
（５）原昭芳「銅鋺考」『長野県の考古学』(財) 長野県埋蔵文化財センター　1996年
（６）岡田博ほか『新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告182　岡山県教育委員会　2004年
（７）正岡睦夫ほか「川入遺跡」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２　岡山県教育委員会　1974年

岡山県内出土銅鋺一覧表参考文献
２　註（２）文献
３　註（２）文献
　『久米町史　上巻』久米町教育委員会　1984年
４　新納泉・尾上元規ほか『定北古墳』北房町教育委員会　1995年

その他参考文献
　中野政樹「供養具」『仏教考古学講座　第５巻　仏具』雄山閣　1978年
　岡崎穣治「密教法具」『仏教考古学講座　第５巻　仏具』雄山閣　1978年
荒神西古墳出土銅鋺実測図については註（２）文献より再トレース